三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要　2008,　第28号，33－38頁

# 附属幼稚園での継続的な観察の意味を探る：学生は何を感じ，何を考えたのか

滝　口　圭　子*

保育者を養成する4年制大学，学部にあっては，4年間という長期的視野に立ちながら，各年次の個々の授業を具体化していく必要がある。本研究では，保育者養成教育課程の2年目に在籍する学生が，大学の授業において何を契機としてどのような変容を遂げていくのかを探ることを目的とし，2年次前期授業における附属幼稚園での継続的な観察を通して見受けられる学生の意識の変容を追った。学生の意識の変容については，学生が提出するレポートをテキストマイニングの手法を用いて分析することにより追跡した。2006（平成18）年度前期「幼児教育方法」受講者10名の計4回の観察レポートを分析した結果，主として子どもの活動を記述する傾向から，保育者と子どもの関係性に着目し，両者のやり取りをより具体的に把握する傾向へと推移していた。

キーワード：教員養成，保育者養成，幼児教育，観察，教育課程

教員養成や大学経営を巡る課題が各所で提起される昨今，教員養成大学や学部は現在の日本が直面している「教育」の課題を見据えつつ，大学や学部が存在する地域が抱える「教育」の課題を敏感に反映しながら「教員養成」に取り組まねばならない。所属している地域から切実に求められる大学や学部たろうとする努力が，程度の差はあれ全国の大学や学部において続けられているであろうことは想像に難くない。そうした現状において，保育者を養成する4年制大学，学部にあっては，2年間で幼稚園教諭免許（2種）と保育士資格を取得できる近隣の2年制短期大学と共同して担う役割とともに，4年制大学，学部が率先して担っていくべき役割との両者を，的確に把握し且つ周囲に情報公開していく責務がこれまで以上に課せられているといえよう。

安藤（2000）は，保育者養成における短期大学生の成長を記述している。具体的には，短期大学生が教育・保育実習後に，実習中に遭遇したエピソードを自身で取り出し，エピソードが生じた場での学生自身の対応とその理由や，実習後に改めてエピソードに向き合うことで得られた新たな気づきや発見を「考察」としてまとめ，他学生と協議する過程で，ひとりひとりの子どもを理解し，その内面を読み取る力を培っていく様子を紹介している。安藤（2000）の論考から，「4年制大学，学部が率先して担っていくべき役割」の輪郭を示すと考えられる以下の2点を指摘したい。まず，「ゆっくりと流れる時間」である。安藤（2000）は，2年制短期大学は4年制大学とは異なり，学生がゆっくりと時間をかけて，多方面から保育について学び，研究を進めていくという時間的余裕がないことを指摘している。論考では，そうであるが故に，2年制短期大学においては2年間という短い期間に何を伝えていくべきなのかを積極的に模索していく姿勢を提起している。次に，「自ら築く子ども理解」である。安藤（2000）によれば，平成元年の幼稚園教育要領の改訂とそれに続く保育所保育指針の改訂以前は，保育者養成校においては子どもの前に立った時にすぐに役立つ保育技術の指導に力が注がれており，子どもを遊ばせるための環境の整え方や指導のテクニックの伝授に重点が置かれるという傾向があったようだ。しかし，幼稚園教育要領及び保育所保育指針の改訂を経た今は，以上のような保育技術の習得の必要性を自覚しながらも，保育者養成校は，子どもに何をどう教えるかといった保育技術の伝達ではなく，子どものよりよい発達の援助者となるために，子どもを正しく理解する力を育てることに重点を置くべきではないかと問いかける。以上から，「4年制大学，学部が率先して担っていくべき役割」の一側面として，「ゆっくりと流れる時間」の中で学生が「自ら築く子ども理解」を丹念に支援し，将来的に子ども理解のエキスパートとして活躍できる保育者を養成することが挙げられるのではないかと考える。

上述の「自ら築く子ども理解」は，単一の授業で成し遂げられるものでは決してなく，4年間の教育課程を通して醸成していくものである。4年間という長期的視野に立ちながら，各年次の個々の授業を具体化していく必要がある。4年間を過ごす中でも，学生の子ども理解に大きな変容をもたらす契機となるのが教育実習であろう。大西・秋山（2003）は，保育者養成短期大学1年生を対象に，観察・参加実習を経た学生が，子どもに会えるだけで感動する体験から，自身が持っている思い込みの子ども像との葛藤を経て，子どもの概念を拡大し，子どもひとりひとりが違うことへの気づきを得ていく過程を記

＊　三重大学教育学部幼児教育講座

述した。また，重成・上田・小池（2005）は，保育者養成短期大学1年生が見学・観察実習を経て，総体的に個と集団の両方へと視点を広げ，保育者主体から幼児主体へと指導理念を転換し，子どもの育ちを促す観点を獲得したことを報告している。

三重大学教育学部に所属する学生の多くは，主たる取得教諭免許の教育実習を3年次後期に行っている。短期大学とは実習の体系が異なるものの，実習が学生の自発的な変容を生み出すひとつの大きな契機であることは同様であると考えられる。その場限りの一大イベントに位置づけられてしまう可能性を秘めている教育実習を，学生の成長に確実につなげていくためには，教育課程として，実習前後の授業を有機的に構成していく必要がある。そこで本研究では，教育実習に行く前年度に当たる2年次前期における望ましい授業構築を目指し，まず，保育者養成教育課程の2年目に在籍する学生が，大学の授業において何を契機としてどのような変容を遂げていくのかを探ることを目的とする。具体的には，2年次前期授業における附属幼稚園での継続的な観察を通して見受けられる学生の意識の変容を追う。学生の意識の変容については，学生が提出するレポートをテキストマイニングの手法を用いて内容分析することにより明らかにする。テキストマイニングは，膨大なテキストデータを解析することを通して，言葉のパターンや規則性を発見して知識や情報を得る技術（斉藤・宮腰・赤星・岡本・猿渡・杉野，2005）であり，主としてマーケティングリサーチの一手法として研究開発が進められているが，その一方で，養護教諭特別別科学生を対象とし，授業参観後（斉藤・星田・宮腰・津島・市村，2006）や養護実習終了後（斉藤ら，2005）の感想文を分析して学生の学びをとらえる試みも続けられている。テキストマイニングにより一定数のテキストの分析が可能になるが，特定の学生が記した文字資料を手作業により分析することから得られる有益な情報もあり，両方の情報を総合的に解釈していく姿勢が必要であろう。

## 方　法

**調査対象**　2006（平成18）年度前期「幼児教育方法」を受講した三重大学教育学部幼児教育コース2年生10名であった。

**授業科目　受講者**：授業科目名「幼児教育方法」は授業科目名「幼児の生活と保育」と別科目同内容開講であり，「幼児の生活と保育」として人間発達科学課程4年生1名及び3年生11名計12名が受講していた。受講学生全22名は2班に分かれ，各班4回ずつ観察を行った。授業計画を表1に示す。**授業目的**：シラバス上及び初回のオリエンテーションにおいて，授業目的として以下の3点を学生に伝えた。①子どもを「みる」ことの難しさと楽しさを知る。②3か月間の子どもの変化を自らの視点でとらえる。③他学生の発表を聞くことを通して，現象を複眼的にとらえる態度を養う。**観察内容**：観察から問題を発掘することとし，観察する対象（子ども・保育者・子どもと子ども・子どもと保育者等）や現象（ものの取り合い・先生の取り合い・順番の交渉・協力場面等）に関して明確な指定や制限は設けなかった。第1回の観察後，大学において中間発表を行い，教員や他学生とのやり取りを通して，各自，問題・目的・方法の明確化を図った。問題・目的・方法とは，「自分は子どもや子どもの環境に関するどのような内容に，どのような理由で問題意識を抱き，どのような方法で子どもや子どもの環境を追跡するのかに関する情報」とした。残り3回の観察後，大学において最終発表を行った。最終発表では，計4回の観察を通じて収集した事例やデータを分類，分析，解釈して作成した最終レポートについて質疑応答を行った。最終発表において教員や他学生から指摘された点に関して加筆，修正を行った改訂版最終レポートを附属幼稚園

表1　2006（平成18）年度前期「幼児教育方法」授業計画

| | | |
|---|---|---|
| 第1〜3回<br>（三重大学） | 4／12<br>4／19<br>4／26 | オリエンテーション<br>講義 |
| 第4・5回<br>（附属幼稚園） | 5／10（1班）<br>5／17（2班） | 第1期観察（毎回のレポート提出）<br>問題と目的の明確化 |
| 第6・7回<br>（三重大学） | 5／24<br>6／7 | 中間発表<br>問題・目的・方法の確立 |
| 第8〜13回<br>（附属幼稚園） | 6／14（1班）<br>6／21（2班）<br>6／28（1班）<br>7／5（2班）<br>7／12（1班）<br>7／19（2班） | 第2期観察（毎回のレポート提出）<br>各自が設定した目的と方法に基づく事例・データ収集 |
| 第14・15回<br>（三重大学） | 7／25<br>7／26 | 最終発表 |

に提出した。

**分析対象**　幼児教育コース2年生10名の第1回から第4回までの観察レポートを対象とし，フリーアンサー分析ソフトを用いて分析した。観察レポートについては，初回オリエンテーション時に，授業終了後に電子データでの提出を求めることを伝えておいた。

## 結果と考察

第1回から第4回までの各回の観察レポートにおいて多く登場した名詞上位4個を表2に示す。また，各回の上位名詞4個を特定キーワードに指定し，関連性の強いキーワード（名詞・動詞）同士が近くに配置されるようマッピングした（図1〜4）。関連性の強さは，同じテキスト中の同時出現頻度の多さから算出される。

表2から特定キーワードの推移を探ると，第1回，第2回のレポートでは年中，年長，男の子，女の子といった子どもを示す名詞が多く使用されていたが，第2回から保育者，先生が登場し，その後第3回，第4回と最も頻繁に現れる名詞となっていったことがわかる。そのことに伴い子どもを示す名詞は減少していった。次にキーワードマッピングについては，第1回レポートのマッピング（図1）では，特定キーワードにリンクするノードが少なく距離も遠かった。このことから，第1回レポートの特定キーワードは，各学生がそれぞれのレポートで使用した回数は多いが，ある学生が同じレポートに使用したキーワードが多様で統一的でない可能性がうかがえる。しかし，第2回レポート以降は特定キーワードへのリンクが増加し，第

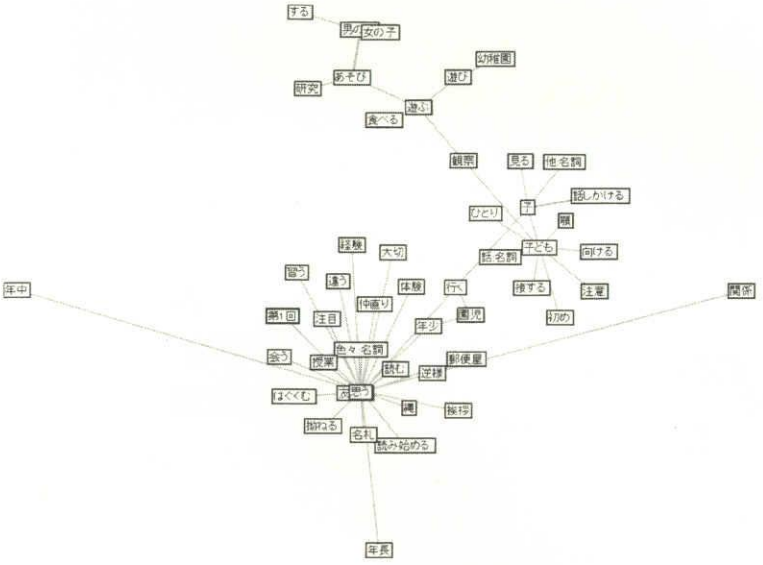


図1　第1回レポートのキーワードマッピング

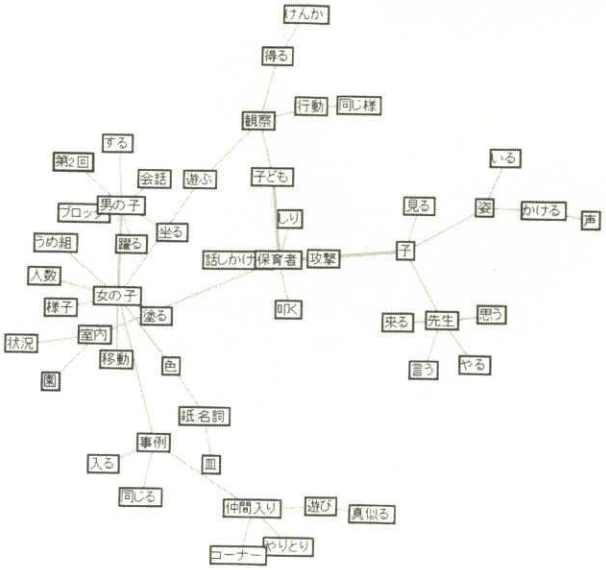


図2　第2回レポートのキーワードマッピング

2回レポートのマッピング（図2）では特定キーワード「男の子」「女の子」のリンクが，第3回レポートのマッピング（図3）では，特定キーワード「先生」「女の子」のリンクが，第4回レポートのマッピング（図4）では，特定キーワード「先生」のリンクが増加し且つキーワード間の距離も短くなった。第1回から第4回までのレポートのキーワードマッピングの推移から，観察において，主として子どもの活動を記述する傾向から，保育者と子どもの関係性に着目し，両者のやり取りをより具体的に把握する傾向へと推移したことがうかがえる。

表2　レポートに多く登場した名詞

| | 第1回 | 第2回 | 第3回 | 第4回 |
|---|---|---|---|---|
| 名詞 | 年長<br>女の子<br>関係<br>年中 | 男の子<br>女の子<br>保育者<br>事例 | 先生<br>女の子<br>事例<br>子 | 先生<br>グループ<br>色<br>観察 |

三重大学教育学部で開催された秋田大学との合同ポスターセッション（2006年12月6日開催）において，2006（平成18）年度前期「幼児教育方法」での取り組みについてポスター発表を行った（資料参照）。ポスターの右欄に受講学生のレポートの一部を紹介した。また，ポスター作成に向けて「“幼児教育方法”を受講する中で何が変わったのか。もしくは変わらなかったのか。もし変わったとすれば，それは何をきっかけとしてもたらされたのか」という質問を学生に投げかけた。資料の下段の図は学生から得られた回答を滝口がまとめたものである。資料下段の図から，受講学生が中間発表で教師や学生との討論を経た結果，第1期観察では子どもの中に入って

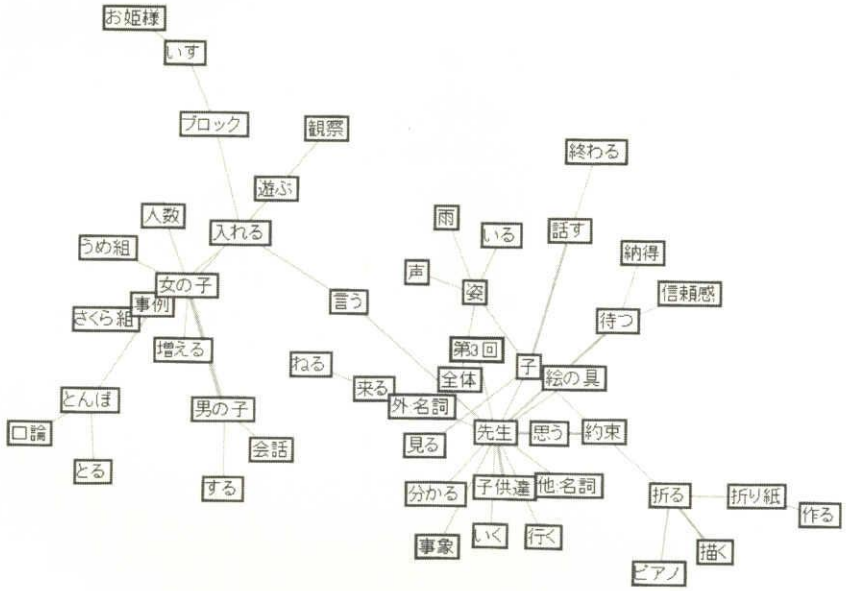


図3　第3回レポートのキーワードマッピング

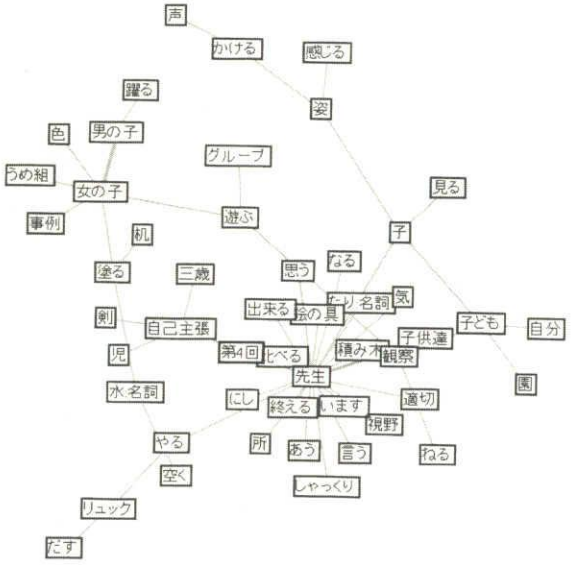


図4　第4回レポートのキーワードマッピング

自分の主観を入れて観察しており，子どものありのままの姿や現象の真相を正確に把握できていないことに気づき，第2期観察では子どもや現象を客観的にとらえようと努力したことがうかがえる。授業における意識や態度の変化としては，①全体に目を向けられるようになった，②全体を見る中でも1人1人をよく見るようになった，③観察してもっと知りたいという気持ちになり自分で文献等を調べた，といった内容が挙げられている。レポートのキーワードマッピングにおいては，第1回（図1）と第2回（図2）の間に大きな構造の変容が認められ，それ以降は構造においては大きく変化しているわけではない。学生が自ら総括した自分たちの変容の契機と内容は，キーワードマッピングで得られた構造の変容を裏付けるものとなっているといえよう。

本研究では，保育者を養成する4年制大学，学部が4年という「ゆっくりと流れる時間」の中で学生が「自ら築く子ども理解」を丹念に支援することを提起し，「自ら築く子ども理解」を培う重要な機会となる実習の前後の授業を有機的に構成していくことの必要性を踏まえ，2年次前期における授業の在り方を検討した。その結果，以下の2点を提起したい。まず，実習に行く前に，保育現場に実際に足を運び，自らの目で子どもや現象を把握することである。次に，学生が抱いた感想や意見に対して，教師が直接的に修正を加えるのではなく，学生同士の相互作用を中心に据え，学生自身が気づきを築いていく環境を構成することである。つまり，「自ら築く子ども理解」のためには，子どもが生活する姿を学生が実際に目にすることが必要であり，また学生が仲間とともに成長する力を教師が信じ，学生に課題解決を委ねることも有効に機能するであろう。そして，教師が学生とともに何度も現場に出向き，学生の成長を待つためには，それだけの「ゆっくりと流れる時間」が必要となるのである。

鈴木・田中（1998）は，4年制大学3年生において，授業で提示された事例への判断内容が「子どもを外側から捉えた理解」から「子どもを外側から捉えた理解・“子どもが～自分から～しようとする”を捉えた理解」に至ることを示した。また，小林・後藤（2004）は，教育実習を終えた4年生1名の保育場面をビデオに録画し，学生自身が自己評価をするとともに，4年生3名とビデオを見ながらカンファレンスを行うことで，遊びにおける新しい方向性が見出せたり，自分では気づかなかった子どもの気持ちを知ることができたことを明らかにした。本研究では2年次前期のみを分析の対象としたが，今後は後期も含めた1年間，更には入学から卒業までの4年間を視野に入れ，保育者を養成する4年制大学，学部における学生の変容を記述し概括する作業が求められる。そして得られた結果を踏まえ，4年間の教育課程の望ましい在り方を模索し，提起していく必要がある。

## 引用文献

安藤節子　2000　保育者養成における学生の成長　発達，**83**，9－15.

小林真・後藤香織　2004　学生の保育者としての資質を高めることは可能か？：ビデオ視聴とケースカンファレンスを通じて　富山大学教育実践センター紀要，**5**，1－6.

大西道子・秋山有美子　2003　保育者養成における学生の成長過程：観察・参加実習における子ども理解　保育士養成研究，**21**，29－36.

斉藤ふくみ・星田正治・宮腰由紀子・津島ひろ江・市村國夫　2006　中学校保健体育科授業参観後の感想文の内容分析の試み：養護教諭特別別科学生を対象として　熊本大学教育実践研究，**23**，161－170.

斉藤ふくみ・宮腰由紀子・赤星有加・岡本智子・猿渡真由美・杉野愛子　2005　養護実習終了後における感想文の内容分析の試み：養護教諭特別別科学生を対象として　熊本大学教育学部紀要，**54**，203－210.

重成久美・上田淑子・小池美知子　2005　保育者養成課程における学生の保育場面の理解の変容過程に関する研究：1年次の見学・観察実習の経験を通して　今治明徳短期大学研究紀要，**29**，41－51.

鈴木政勝・田中吉資　1998　学生における保育判断の変化：保育者養成と関連して　教科教育学研究，**16**，93－109.

## 謝　辞

本研究の実施にご協力いただきました三重大学教育学部附属幼稚園の皆様，そして子どもたちに心より感謝申し上げます。また，本研究における幼児教育コースの学生の学びは，人間発達科学課程の学生との相互作用がなければ成立しなかったと言っても過言ではありません。人間発達科学課程の皆さんは本研究に欠かせない大切なメンバーでした。深謝申し上げます。本研究での相互作用が皆さんの学びにも貢献しておりますよう願ってやみません。

授業科目「幼児教育方法・幼児の生活と保育」

# 附属幼稚園での継続的な観察から見えてきたこと

## 発見・発掘・発表：拷問の日々

上山千晶・小野佑子・菅谷英美・谷田真希・山田真代
三重大学教育学部幼児教育コース2年
指導教員：滝口圭子

## 授業「幼児教育方法・幼児の生活と保育」

### 講義の目的

・子どもを「みる」ことの難しさと楽しさを知る。
・3か月間の子どもの変化を自らの視点で捉える。
・他学生の発表を聞くことを通して，現象を複眼的に捉える態度を養う。

### 受講者

・幼児教育コース　2年生10名
・人間発達科学課程　4年生1名3年生11名

### 授業計画

| | | |
|---|---|---|
| 第1～3回（大学） | 4/12, 19, 26 | オリエンテーション<br>講義 |
| 第4・5回（附属幼稚園） | 5/10, 17 | 第1期観察（毎回のレポート提出）<br>問題と目的の明確化 |
| 第6・7回（大学） | 5/24, 6/7 | 中間発表<br>問題・目的・方法の確立 |
| 第8～13回（附属幼稚園） | 6/14, 21, 28<br>7/5, 12, 19 | 第2期観察（毎回のレポート提出）<br>各自が設定した目的と方法に基づく<br>事例・データ収集 |
| 第14・15回（大学） | 7/25, 26 | 最終報告 |

### 研究テーマ

| 学籍番号 | 氏　名 | 研 究 テ ー マ |
|---|---|---|
| 205011 | 岩田桃子 | おままごとの違い |
| 205013 | 上山千晶 | 仲間入りの仕方における友達とのやりとり |
| 205021 | 小野佑子 | 幼児の自己主張と先生の対応：約束 |
| 205044 | 菅谷英美 | 子どもの発想力と工作 |
| 205049 | 薗田春香 | 複数の子どもたちに接するときの保育者の対応 |
| 205051 | 高橋典子 | 3歳児の他人を思いやる行動について |
| 205060 | 谷田真希 | 幼児の自己主張の程度と方法について |
| 205079 | 中山郁絵 | 5歳児の性別によるあそびの違い |
| 205095 | 平田　梢 | ごっこ遊びから子どもの興味を探る |
| 205119 | 山田真代 | 多数の子どもに注意を向けた保育者の関わり方 |

### レポート紹介

| | |
|---|---|
| 第1期 | すみれ組（4歳児）の子どもたちは皆自分の話を聞いてほしくてたまらない様子でした。「先生！」と叫び続ける子もいれば，（先生に気づいてもらえずに）がっかりしたり，あきらめたりして帰っていく子もいます。日頃一度にたくさんの子どもを相手にしている先生は後者の子達の思いを見落としがちになってしまうのではないかなと思いました。 |
| 第2期 第1回 | 今回の観察で，客観的に観察することの重要性がわかりました。私は前回の観察で幼児に対して自分の主観を入れすぎたがために，たくさんの子どもに対応する中で先生は幼児の思いを見落としてしまうと感してしまいました。しかし今日の観察で子どもの思いを見落としている先生はいませんでした。それぞれの先生が色々な形で幼児の思いをくみ取っていました。…中略…先生は常に動き回っていて色々な場所に意図的に移動することで色々な子と触れ合うことができるんだと思いました。また，先生が「後でしよう」という「約束」をしていました。私はこの「約束」が一つの要になってくるのではないかと思います。 |
| 第2期 第3回 | 3回の観察を終えて：観察は拷問のようでした…。子どもたちがとても楽しそうに遊んでいるのに一緒に遊べないし，一緒に遊ぼうと言われてもごめんねって断らなくてはいけないし，何度観察を放棄して遊んでしまえと思ったか…。でも今観察を終えて観察のすごさというか素晴らしさを実感しています。以前は子どもたちと遊んでいるときに一度にどっと喋りかけられたり，子どもが予期せぬ行動をすると慌てずに先生らしい振る舞いをしなくてはと思ってかえってパニックになっていました。しかし観察でこの子は何を求めているのだろうとか先生はこういうときこんな対応をするんだとか，そこから一歩引いた目線で見ることができ，実際に子どもたちと接する時もなぜか落ち着いて対応することができるようになりました。 |
| 最終報告 | 中間発表の時点で，私は1対30人の保育環境では先生は子どもの主張・要求を見落としがちになってしまうのではないかと考えそれを問題視していたが，第2期観察では幼児の思いを見落としている先生はいなかったように思う。むしろ先生達の「子どもの思いをくみ取ろう，漏らさないようにしよう」という姿が見られ，大事なことは見落とすか・見落とさないかではなく，見落とさないようにしようという思いがあるかないかということなのではないかということに，この観察で気づくことができた。 |

### 成長の過程

第1期観察
子どもの中に入って自分の主観を入れて観察

人間発達の学生との視点，観察力の違いを目の当たりにする。
→ありのままの姿，真相を正確に把握できていないことに気づく。

**中間発表**

第2期観察　客観的に見ようと努力！！
・全体に目を向けられるようになった。
・その中でも1人1人をよく見る。
・新しい発見がそれぞれにあった。
・観察してもっと知りたいという気持ちになり，自分で文献等を調べた。

**楽しさ**

子ども目線
今まで…
子どもと一緒にいることが楽しい

＋

先生目線
変化…
見て，考えて，新しい発見があることが楽しい

→ 子どもっておもしろい！！

**難しさ**

・一緒に遊びたい！！
・「ごめんね，今遊べないの」
・個別の事例を抽象化，一般化すること
・テーマを絞ること

Thank you for your watching！